

## VI 付編 資料紹介等

### 1 齋藤秀平氏旧蔵の縄文土器・土師器

齋藤秀平氏（以下「齋藤氏」という。）が旧蔵していた縄文土器1点と土師器1点について資料紹介を行う。

**収集の経緯** 齋藤氏旧蔵資料は、平成4年に新潟市内の齋藤氏宅から「齋藤秀平氏収集文書」の一部と共に収集した。「齋藤秀平氏収集文書」は歴史文化課歴史資料整備室に保管され、土器など数点からなる齋藤氏旧蔵の考古資料は新潟市文化財センターで保管している。

（金田拓也）

**齋藤秀平氏について** 齋藤氏は、明治17（1884）年に新潟県北蒲原郡中条町（現 胎内市）に生まれ、新潟県高田師範学校を卒業後に師範学校教諭となったが、その傍ら昭和初期から新潟県が刊行した『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』の調査委員として作成に携わるなど、新潟県内各地で考古学研究を行った。その成果は、『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯に集約されるなど〔新潟県1937〕、新潟県考古学界の草創期に新潟県の考古学の発展に尽力した。（寺崎裕助）

**縄文土器（図1-1）** 遺存状態は良く、口縁部が2割余り欠損するほかは完形である。口縁部外面に「西頸城郡糸魚川町長者ヶ原」、内面に「西頸城長者ヶ原」・「昭和□年」というような注記を読み取ることができたことから、この土器は、現在の糸魚川市長者ヶ原遺跡から出土したものと考えられる。

長者ヶ原遺跡は、糸魚川市大字一ノ宮字栗畑他に所在し、市街地南側の標高90～110m前後の台地上に位置を占めている。遺跡は、北陸地方を代表する縄文時代中期の集落跡であるばかりではなく、日本列島における翡翠加工の存在を初めて実証した遺跡として国史跡に指定されており、その面積は約14haにおよんでいる。

齋藤氏も昭和4（1929）年に長者ヶ原遺跡で発掘調査を行っており、その時得た土器をもって長者ヶ原式を設定したものと考えられる。この縄文土器も、内面に「昭和□年」という注記が残されていたことから、昭和4（1929）年の発掘調査で出土した可能性がある。齋藤氏は長者ヶ原式土器について、「器は二つの種類があって、一は其の大きさは坪穴式程度の深鉢を中心に、多少其の口縁部の張り出した類で、（中略）器の全面或は口縁部に微隆起線紋が展開する。微隆起線はおおむね幾つかの区割りを作り、その内外に爪形紋、隆起線紋、刺突

紋が従う。（中略）次は極めて厚手で土質は粗、稀に雲母粉末を含み、赤褐色を呈し、大形品に富み、其の概形は大体、筒形乃至深鉢形にして、口縁の内彎しつつ開くのが多い。雄渾な隆起線紋や立体装飾が付加される為、種々に変化した形に感じさせる。即ち此の式は隆起線紋の発達している点で、石器時代中最高峰を示すが、（中略）半肉彫風のマッシュヴな曲線紋を形成し、之に爪形や曲直線を添加して、殆んど器面に空白部を作らない。〔新潟県1937〕と述べ、長者ヶ原式には2つのタイプがあることを指摘している。この2つのタイプは、前者は北陸地方の所謂新保・新崎式、後者は北陸地方の所謂上山田・天神山式と考えられている。さしずめ今回紹介する縄文土器は、前者に当たる。

この土器は、器高13.3cm～13.5cm、口径9.6cm、底径5.7cmの法量を有する台付の小形深鉢である。脚部の高さは3.4cm、胴部最大径は中央にあつて9.2cmである。胴部は、底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁は平であるが、左右では器高が若干異なることから、左側にやや傾く。脚部は、底部から直線的に開くが、端部は内反気味で、全体としては湾曲を帯びる。

文様は、無文地に半截竹管を用いた2条1単位を基本とした平行沈線で描かれている。口縁部は無文帯である。頸部には横方向の平行沈線が1条めぐって、口縁部と胴部を画する。胴部は、3条1単位の縦位平行沈線で13に区画され、その形状は長大蓮華文の様である。

色調は、赤褐色を基調とするが、胴部上半以上は暗赤褐色を呈する。外面は、口縁部から胴部上半にかけての半分くらいの部分に、スス状・オコゲ状の炭化物の付着が認められる。また、胴部上半外面の一部に黒斑と思われる痕跡がみられる。内面は、底部近くの胴部下半の一部に、スス状の炭化物が付着している。胎土中には白色・黒色を主体とした砂粒が多く含まれており、中でも白色の砂粒の多さが際立っている。成形は、外面はそれほど丁寧ではなく、口縁部はある程度滑らかであるが、胴部や脚部はでこぼこしており、滑らかさに欠ける。一方、内面の成形は丁寧で、底部を除けば滑らかである。

時期と系統は、半截竹管を施文具として平行沈線で施文していること、胴部区画文が長大蓮華文に似ていることから、北陸地方の中期前葉新崎式の系統を引く土器、すなわち本県で言うところの千石原式土器に比定できるものと考えられる。千石原式土器は、新旧2段階に細分

されているが、この土器は長大蓮華文類似の区画文をもつことから、新式に相当するものと考えられる。

この土器のように脚台が付くものは、富山県や石川県といった北陸地方の縄文時代中期では、それほど珍しいものではなく、むしろ一般的なものに近い存在である。しかし、それはこの土器よりも新しい中期中葉の上山田・天神山式の段階のことである。この土器の時期に脚台が付く土器はほとんど知られておらず、全体像がうかがえるものは、本県では見附市羽黒遺跡出土の1個体のみである。その土器は、現存高14.4cmと紹介資料よりも少し大きい、小形の深鉢形土器の部類に入る。

一方紹介資料は、研究史的な観点においても興味深く、且つ貴重である。先述したようにこの資料は、内面に「昭和□年」という昭和一桁と思われる注記が残されていたことから、昭和4（1929）年の発掘調査で出土した可能性がうかがわれるが、その時の出土を特定できる土器は今まで確認されていない。また、『新潟懸史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯などに掲載されている資料は、その所在が不明で、現存の存否も明らかではない。そういう意味でもこの紹介資料は、「齋藤氏が収集した数少ない資料」ということで貴重である。（寺崎裕助）

土師器（図1-2） 遺存状態が良く、口縁部に若干の欠損があるが、ほぼ完形の資料である。内面に齋藤氏を書いたと考えられる注記があり、「中頸 斐大堅穴 松葉百歩発掘／昭和六、十一、二〇」と読める。『新潟懸史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯〔新潟県1920〕では、齋藤氏も発掘調査を行った中頸城郡斐太堅穴群の報告がされている。注記の「中頸 斐大堅穴」が、この斐太堅穴群を示していると考えられ、斐太堅穴群周辺で出土したものと考えられる。さらに、「松葉百歩」が詳しい発掘地点を示すものと考えられるが、詳細は不明である。また、「昭和六、十一、二〇」から、昭和6（1931）年11月20日に出土したものと考えられ、先述の第一輯が昭和5（1930）年刊行のため、第一輯刊行後に出土したものと考えられる。第一輯の斐太堅穴群とは、弥生時代の高地性集落として著名な国史跡斐太遺跡のことである。

土師器は、小形の甕と考えられる。底部が平底で、胴部は半ばに最大径を有する胴張形であり、口縁部

は強く外傾する。口径10.8cm、胴部最大径10.4cm、底径4.6cm、器高9.2cmを測る。胎土は、比較的粗く、石英・長石・角閃石・焼土粒などが多数含まれている。しかし一方で、雲母や海綿骨針などは見られない。色調は、内外面共ににぶい橙色を呈する。調整は、外面ではハケメが胴部の半ばから上部にかけて断続的に廻っている。さらに、その上に口縁部ではヨコナデ、胴部の下部ではケズリが確認できる。内面では、ヘラナデが全体に廻っており、口縁部にはその上にヨコナデが確認できる。

時期については、外面調整の特徴など他に例がないため、必ずしも判然としないが、形態などから春日編年〔春日2006〕のⅡ期の可能性が高い。しかし、古墳時代後期以降にこのような小形の甕がある可能性も十分指摘できるため、ここでは6～7世紀頃の広い時間幅で考える。斐太遺跡は、弥生時代後半～終末にかけての集落のため、集落の堅穴式住居跡から6～7世紀頃の土器が出土したと考えるのは困難である。そのため、ここでは斐太遺跡周辺で出土したと指摘するにとどめる。

斐太遺跡の周辺では、初期官衙として注目される栗原遺跡が所在しており、7世紀末～8世紀前半を中心に瓦や赤彩土師器などが出土している〔坂井1981・1982、佐藤2005ほか〕。齋藤氏旧蔵土師器とは、時期・距離的にも近いと、何らかの関係も考えられる。

今回は、詳細な検討を行うことができなかったが、その来歴をはじめ重要な資料である。（金田拓也）

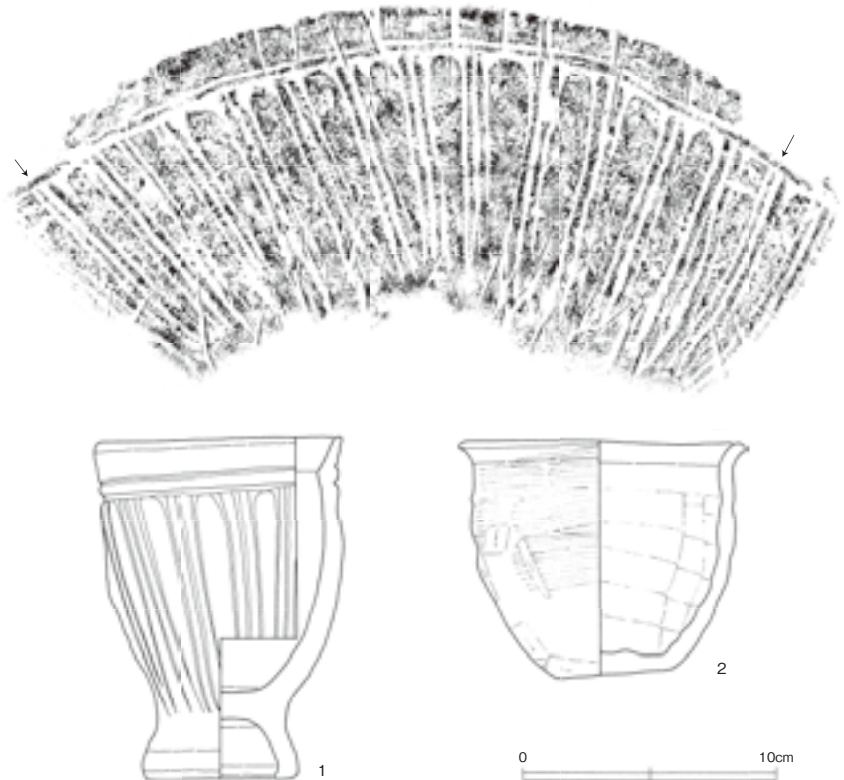


図1 縄文土器・土師器実測図（1/3）

## 2 新潟市西蒲区角田山沖発見の縄文土器

新潟市西蒲区角田山沖海中から引き揚げられた縄文土器1点について資料紹介を行う。

この縄文土器は、平成25年10月6日に、新潟市西蒲区角田山沖15kmの水深150~170mの海底から、底引き網漁の際に引き揚げられた。現在、この土器は、発見者から新潟市文化財センターに寄贈され、同センターで一般公開されている。

遺存状態は比較的良好で、口縁部以外は完全な形を保っている。口縁部はかなり欠損しているが、原形をうかがうことは可能である。法量は、器高36.5cm、口径26cm、底径10cmである。器種は深鉢で、器形は底部から胴部そして口縁部へと外傾気味に直線的に立ち上がる。口縁部は4単位の波状口縁と考えられ、波高は1.5cmである。文様は、口縁部は無文帯で、胴部は全面にLRの縄文が施され、上半は口縁部との境に4条1組の横位沈線文がめぐり、その下方には同様の平行沈線で描かれた横位波状文1条と横位沈線文が2条めぐっている。沈線文は、半截竹管で4条の平行沈線を下書きし、その後に棒状工具で沈線部分をなぞって描出している。そのために、沈線間は半隆起線状を呈する。色調は、内外面共にぶい黄色を基調とするが、外面の一部は明赤褐色である。

また、外面一部に黒斑と思われる痕跡が認められる。胎土は長石や海綿骨針を若干含み、大小の赤色粒や白色粒を主体とした砂粒が多く見られる。成形は、内外面共に丁寧で、滑らかである。土器の内外面には、長く海中にあったことを証明するかのよう、貝の付着痕が多く認められる。

出自は、前述した特徴から、東北地方南部の大木式、あるいはその系統を引く土器と考えられ、長岡市馬高遺跡に類似する土器を見出すことができる。それゆえこの土器は、大木式の外核圏である信濃川中流域の土器にその出自を求めることができそうである。編年は、器形や波状文を有すること並びに沈線の施文手法などから、中期中葉の馬高式の後半に比定でき、大木8a式の終わりから大木8b式の前半に並行するであろう。

この土器は、陸地から遠く離れた海中から引き揚げられたということに特筆すべき点があり、5,000年余り前の縄文時代中期における日本海海上交通の活発な実態を示す具体的な証拠として重要である。新潟県域で縄文土器が海揚げりした例は、今から30数年前の佐渡海峡例に次いで2例目である〔小熊1998〕。このように、陸地から遠く離れた海中深くより完全な形に近い縄文土器が引き揚げられたことは、この2例を除けば聞いたことがない。  
(寺崎裕助)

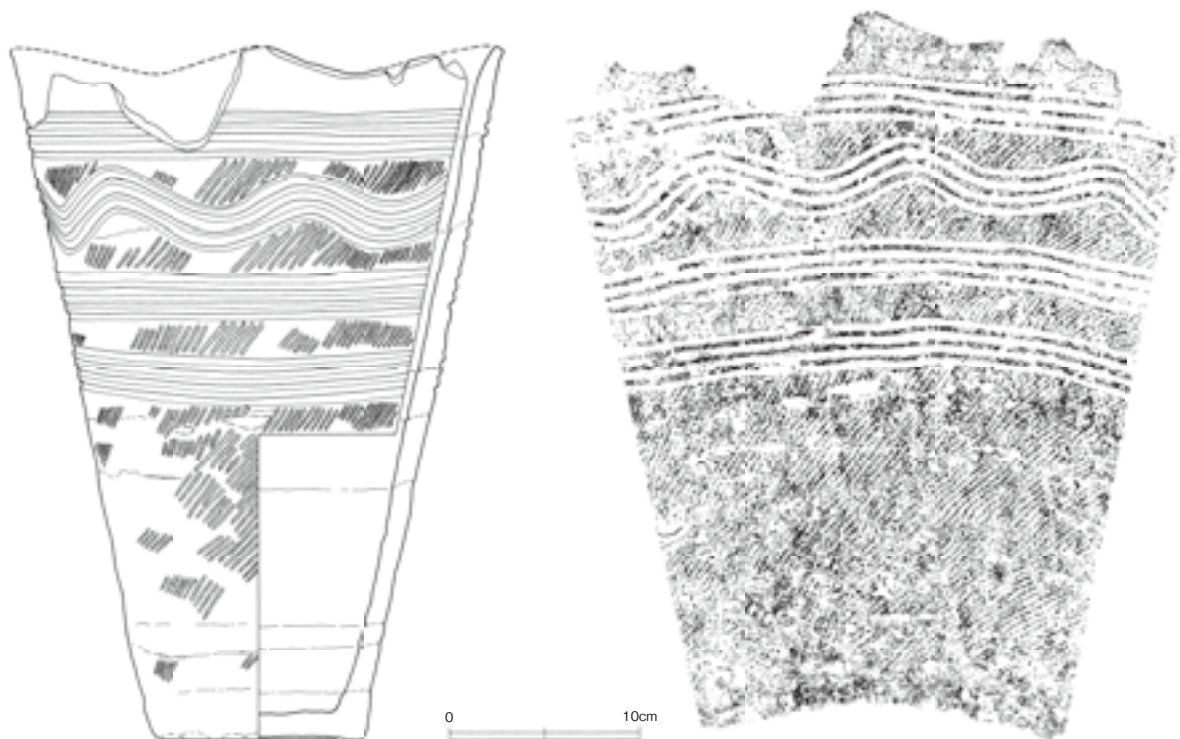


図2 縄文土器実測図(1/4)



### 3 新潟市西蒲区弥彦山沖発見の珠洲焼

本資料6点は、平成24（2011）年4月に情報提供があり、文化財センターで資料化を行ったものである。新潟漁業協同組合西蒲支所に所属する2人の漁師によって、底引き網漁中に引き揚げられた珠洲焼で、いずれも北緯37°43′59″・東経138°41′39″、水深200mの地点で網に掛かったという。引き揚げられた年月日は定かではないが、Y氏が引き揚げた4点（図4 3～6）のうちの2点は平成19年の中越沖地震前、残りの2点とT氏が引き揚げた2点（図3 1・2）は地震後とのことである。

1は珠洲焼の小型壺である。口径9.7cm・底径7.6cm・器高20.5cm。口縁部は「く」の字状に外反し、強くヨコナデされている。胴部はいかり肩気味の器形で、内外面のロクロメは顕著である。肩部には8～13条1単位の波状の櫛目文が3段施されている。底部は静止糸切りである。内外面に貝殻の付着がみられるが、内面の方がやや少ない。2～6は内面に「米」状の卸し目をもつ珠洲焼の片口鉢である。いずれも貝殻のような付着物はほとんどみられず、器面が少し摩耗している。2は口径29.8cm・底径11.4cm・器高13.0cmで、口縁部が一部欠損している。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は10条1単位の「米」状に加えて口縁部近くの1か所に短く横位に施されている。3は口径30.4cm・底径11.8cm・器高11.8cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は16条1単位で

ある。4は口径30.7cm・底径12.0cm・器高11.6cm。口縁部は外面にやや丸みを帯びた面をもち、胴部は直線的に開きながら上方で内湾気味に立ち上がる。卸し目は8条1単位で、「米」状に加えて2か所に短いものがやや雑に施されている。5は口径31.2cm・底径11.6cm・器高13.6cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は内湾気味に開く。卸し目は10条1単位で、「米」状に加えて口縁部近くの1か所に短く横位に施されている。外面に製作時に付いたと思われる沈線状の傷がみられる。6は口径30.8cm・底径11.2cm・器高12.7cm。口縁部は外面に面をもち、胴部は直線的に開きながら上方で内湾気味に立ち上がる。卸し目は16条1単位である。

以上の6点は、吉岡編年のⅡ期の所産と思われ、出土地点も同じということから、同一の船に積み込まれた可能性が高い。本地点は「寺泊タラバ」の範囲であり、そこから揚ったとされる珠洲焼がいろいろなところで確認されているが、特に一括性の高い海揚がり資料は生産地と消費地との関係や流通システムを捉えるために有効な手段となり得ることから、情報の集成・分析が望まれる。

なお、5・6の片口鉢は、情報提供直後の平成24年6月5日にY氏から新潟市が譲受を受け、現在新潟市文化財センターで収蔵・展示している。（渡邊ますみ）

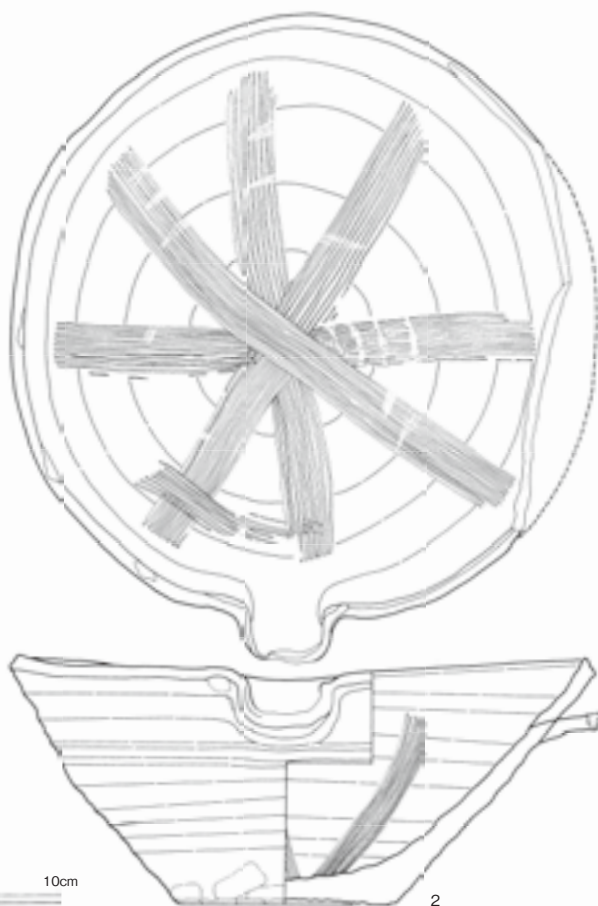
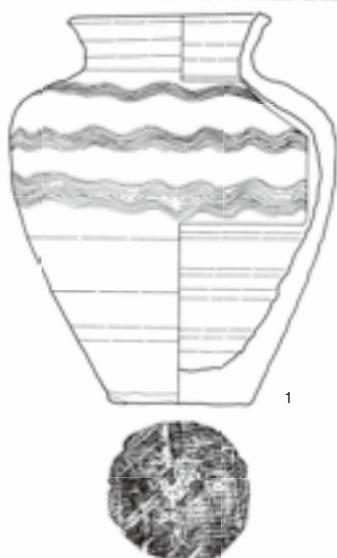


図3 珠洲焼実測図1（1/4）

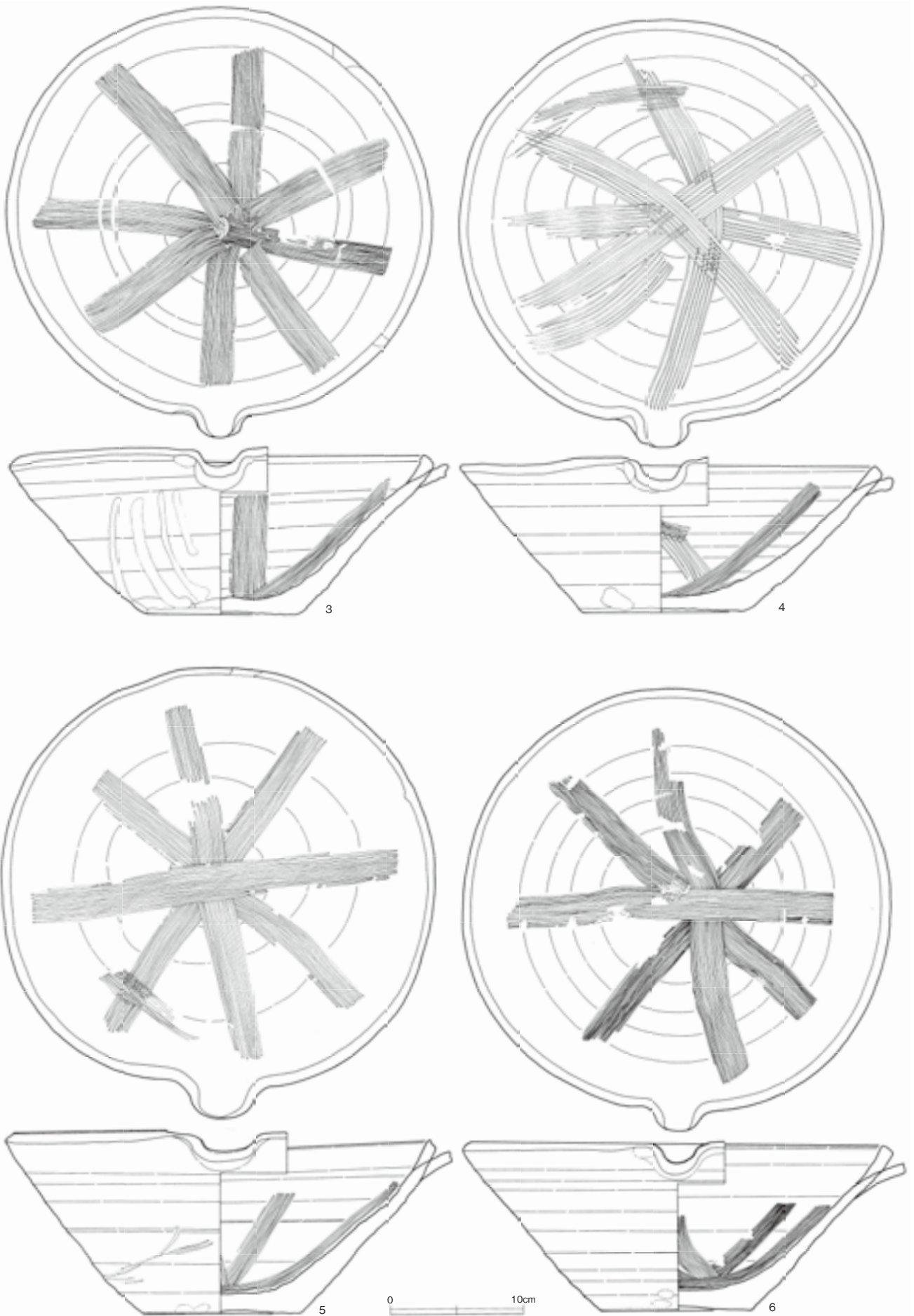


図4 珠洲焼実測図2 (1/4)

## 4 新潟市西蒲区角田山沖発見と伝えられる珠洲焼

明治44（1911）年3月16日付新潟新聞に「又々古代土器」と題された記事がある。この記事に掲載されている珠洲焼が新潟市に寄附された。

寄附に至る経緯 平成25年12月21日付新潟日報に掲載された「角田沖から縄文土器」の記事を受け、新潟市江南区在住の齊藤順次氏より当センターに連絡があった。職員が確認したところ珠洲焼の甕と播鉢であることが判明した。平成26年1月7日付で物品寄附申込書の提出を受け、翌8日付新文セ第232号の3で物品寄附受理通知書を発送し手続きを完了した。

〔新潟新聞〕の記事 旧字体の漢字は常用漢字に変換し、句読点は適宜付した。（ ）は補足である。

「当市古七（古八の誤り）東新道料理店住の江主人大浦鉄次郎氏実父木戸氏が角田沖の鱈場より揚がりたる古代土器を手に入れしとは既記せしが、尚ほ中蒲原郡曾野木村大字俵柳の素封家小林芳一氏も十年前同地に舟遊の折、図の如き古代土器を網にて得られ爾來何心なく所蔵されしに、今回木戸氏の掘出しが評判となるに連れ、当師範西垣教諭に鑑定を乞はれたるに全く同種のものにて確めたる年代は判明せざるも二千年の古を偲ぶ可きと判明せりと、右に付西垣氏の説明大畧左の如し。

一、大なるものは四斗量も容るるに足り小形のもの又一斗を盛るにたる。

一、小形のものは酒器なるべく大形のものは水甕なるべし。

一、大形の甕の中に図他三器を収め更に海松五尺位に延びたるが生じ居れり。

一、時代は矢張り木戸氏の分に差異なき様認められ形は幾分か異なるところなり。概して木戸氏の方よりは粗製にして無器用なる出来なり。種致は此の方にあると見受けられる。

一、表面は布目にあらずして筭目を表し内面はたたき作りにて凹点を以て覆われたり。

一、色は黒褐色にして厚きは木戸氏の分よりも一層厚き方なり。

一、他三品の内一八後の播鉢といふ風のものにして曲り形のすりばち形をなし内面には粗なる筋目を付しあり。

一、年代の確かたる見別けに付かずといへども古代土器なることは勿論にして一見二千年の昔をしのぼるる珍品なり。」

記事の内容を整理すると、古町通八番町東新道にある料理店「住の江」店主大浦鉄次郎氏の父木戸氏が角田沖

の鱈場より引き揚げられた古代土器を入手した。この木戸氏の経緯は明治44年2月17日付新潟新聞「海中より上りし酒甕」の記事にある。木戸氏が入手した古代土器については、坪井正五郎「越後の海底から引上げられた朝鮮土器」〔坪井1911〕に掲載されており、現在でいう須恵器大甕のことである。曾野木村大字俵柳の地主小林芳一氏も明治34年頃に角田沖の鱈場にて甕と播鉢が網にかかり、何気なく所有していた。木戸氏の土器が話題となったので、小林氏も新潟師範学校の西垣教諭に鑑定を依頼した。西垣教諭は平安時代の須恵器と鎌倉・室町時代の珠洲焼の区別がつかなかったようだが、箇条書きの説明文には両者の特徴を書いている。図5の小林氏が所有していた焼物のうち、大きさと形状から左端の大甕と右端下の播鉢が今回寄附された珠洲焼と考えられる。

新潟新聞の記事にある「俵柳の素封家小林芳一氏」とは江戸時代の土地持ち番付にも登場する地主小林家の当主である。小林家は戦後の農地改革により小作地をすべて手放している。齊藤順次氏の祖父は小林家の門番を務めていた。珠洲焼は農地解放後に齊藤順次氏の父が小林家の家財の一部を買い取った際に入手したものだという。

寄附を受けた珠洲焼 寄附された珠洲焼は甕と播鉢である。珠洲焼は康治2（1143）年頃から15世紀第4四半期頃の鎌倉時代から室町時代にかけて現在の石川県珠洲市周辺で生産された。甕は海路を船によって運搬され、石川県から北海道渡島半島にかけての日本海側を中心に流通した。寄附された珠洲焼も運搬の途中で遭難したものが底引き網に掛かり引き揚げられたものと考えられる。

甕の法量は口径60.0cm・底径19.5cm・器高63.4cm、完形品である。口縁部はやや楕円形に歪む。肩部には篋状工具による「キ」の記号文がみられる。外面は右下がりの平行タタキを体部立ち上がり部まで施す。底部は砂底で外周をナデ調整する。時期は吉岡編年Ⅳ2期。

播鉢の法量は口径30.9cm・底径12.6cm・器高12.2cm、完形品である。体部は直線的に開き、口縁部は外傾する。卸し目は1単位幅3.3cmで7条の入り組み技法である。底部は静止糸切り後、外周をなでつける。時期は吉岡編年Ⅱ期。時期については珠洲市教育委員会大安尚寿氏より写真を基にコメントいただいた。（相澤裕子）



図5 「新潟新聞」に掲載された図（明治44年3月16日）



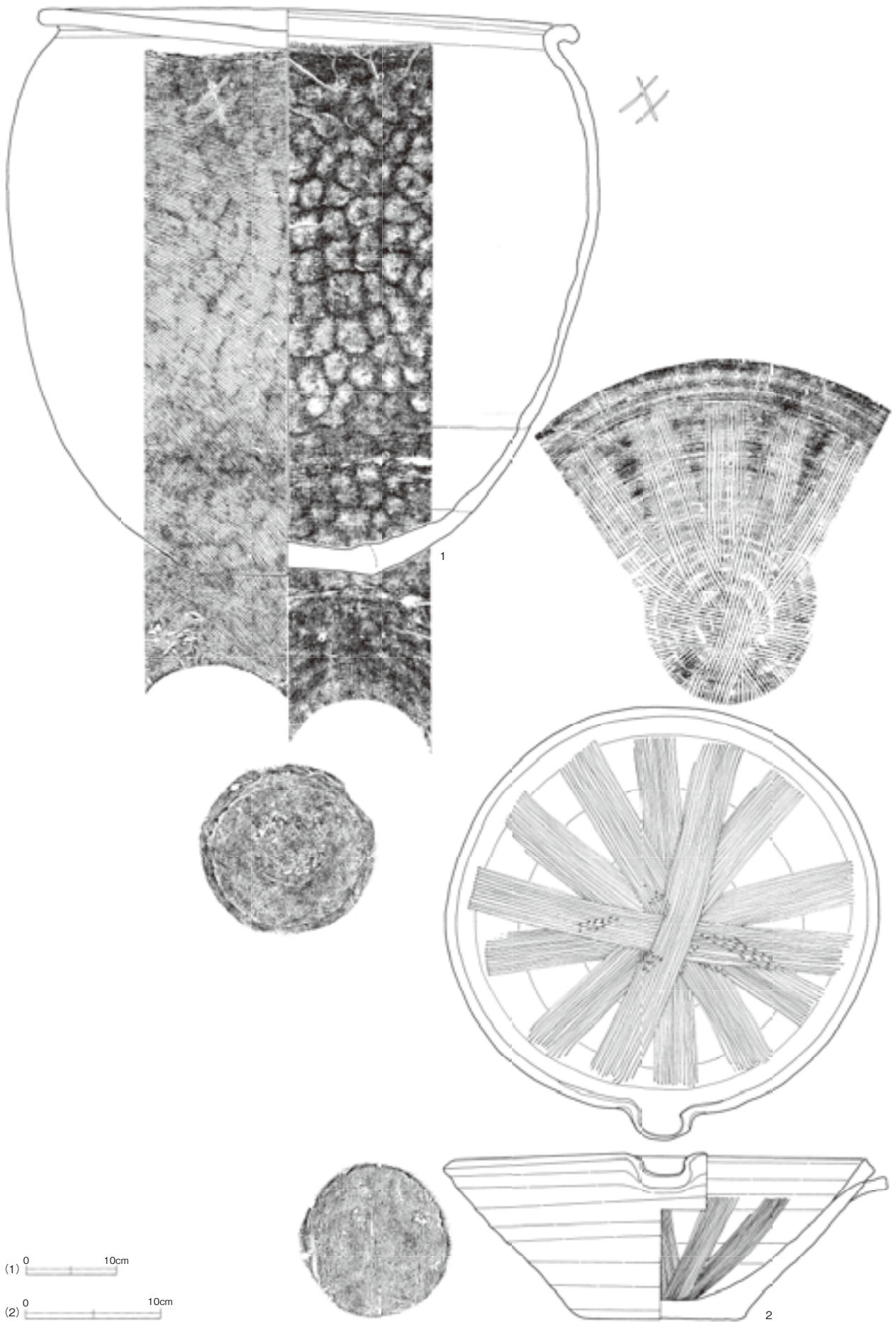


図6 珠洲焼実測図 (1/6、1/4)

## 5 佐渡近海発見の珠洲焼

新潟市在住の本間慶次氏が所蔵している珠洲焼2点について資料紹介を行う。所蔵資料は、本間氏の記憶によれば、昭和の初め頃底引き漁によって佐渡近海から引き揚げられたことを、祖父から聞かされたという。

この珠洲焼は、吉岡康暢氏のいう壺T種中壺A I 2と考えられる〔吉岡1994〕。1は、器形は底部から外傾して立ち上がり、胴部は球卵形を呈して肩が強く張り出し、上半に最大径を有する。頸部は短く直立し、口縁は外反して端部に面を持ち、頸部から口縁部の形状はコの字状を呈する。法量は、口径20.4cm・底径15cm・器高35.5cm・最大径31cmである。タタキメは右下がり粗く、底部から3～8cmくらい上方まで施されているが、タタキが弱いためにナデの痕跡が残る。底部外面には指頭圧痕、胴部内面には当て具痕が認められる。底部の底面は滑らかであることから、海揚げ後に研磨された可

能性が高い。色調は灰白色で、海揚げりを示すかのように、器外面には貝殻の付着が認められる。

2は、1とほぼ同様の器形であるが、胴部は1に比べてやや膨らむ。法量は、口径19.8cm・底径14cm・器高34.5cm・最大径31.2cmである。タタキメは右下がり粗く、底部から2.5～5cmくらい上方まで施されている。胴部内面には当て具痕跡がみられる。底部外面には指頭圧痕、底面は砂底で、板状の圧痕が認められる。色調と貝殻の付着は、1と同じである。

これらの珠洲焼の編年的な位置を考えると、胴部の形状に若干の違いがあるものの、両者はほぼ同じ形態をとることから、同時期の可能性が高い。口縁端部に面を持ち、口頸部は短く、形状が「コ」の字状、胴部は球卵形を呈するという両者の特徴は、珠洲陶器編年のI期を中心に、II期までおよぶ。口縁部の形状からすると吉岡編年のI 2期に位置づけられる。(寺崎裕助)

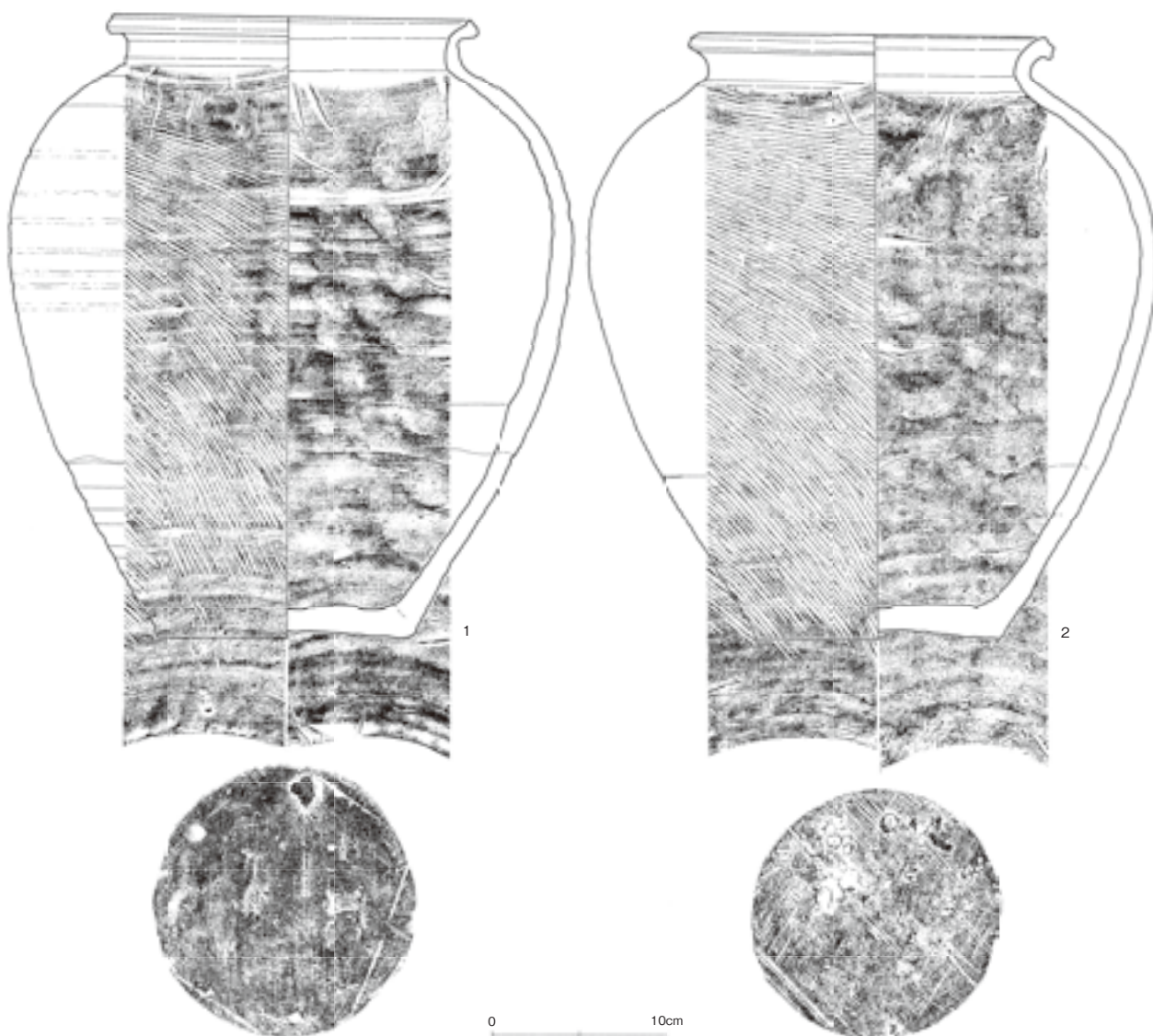


図7 珠洲焼実測図(1/4)





圖 1-1



圖 1-2



圖 2



圖 3-1



圖 3-2



圖 4-3



圖 4-4





図 4-5



図 4-6



図 6-1



図 6-2



図 7-1



図 7-2

## 6 新潟市西蒲区和納館跡出土木簡

和納館跡は、新潟市西蒲区和納1143番地ほかに所在し、JR越後線岩室駅の東側に位置する。西川右岸の自然堤防上に立地し、遺跡の西約300mを西川が北流している。

平成6年、宅地開発に伴って新潟県教育委員会が試掘調査を行い、翌年に岩室村教育委員会が2,600㎡を本発掘調査した。調査では、二重に巡る堀の一部を確認し、堀の内側からは多数の柱穴や井戸44基などを検出した。多量の中世土器のほか、漆器の椀や皿、貨幣、短刀、曲物・櫛・下駄・舟形などの木製品、砥石、石臼、土錘など、豊富な内容の遺物が出土した。遺物の年代は13世紀後半から16世紀後半の約300年間にわたる。発掘調査報告書は平成9年に刊行された(川上1997)。遺跡地は、現在は宅地や公園になっている。

写真の木簡は、調査区のほぼ中央で検出された井戸SE99から出土した。報告書では「簡素な造りの斎串であろう」として報告されたが(割付No.270、遺物No.1162)、平成23年に赤外線カメラによる再調査を実施したところ墨痕が確認され、木簡であることが判明した。釈文は以下の通りである。

「咄天罡(符籙) □□如律令□」

215×25×3 051型式

上下端、左右側面ともに原状をとどめる完形の呪符木

簡である。上端はゆるやかな山形に整形し、下端部は両側面から削ってやや尖らせている。文字は片面にだけ記され、「咄天罡」「□□如律令」の呪句や、呪い符号(符籙)が書かれている。

「天罡」(=天罡星)は北斗星を示す道教の神で、治病・消災・延命に効能がある神とされる〔広島県立歴史博物館2000 a・2000 b〕。呪句の「咄天罡」を記す木簡(「出天罡」を含む)は、県内では、新潟市(旧白根市)小坂居付遺跡〔新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2012〕、村上市(旧神林村)城田遺跡〔神林村教育委員会・山武考古学研究所2001〕、阿賀野市(旧笹神村)腰廻遺跡〔笹神村教育委員会2002〕で出土している。(相澤 央)

「  
咄  
天  
罡  
(  
符  
籙  
)  
□  
□  
如  
律  
令  
□  
」





## 7 古津八幡山遺跡における古代米及び畑作物の栽培実験について

平成25年度に古津八幡山遺跡東麓にある休耕田を地権者より借用し、市民参加で古代米（黒米・赤米）と畑作物の栽培実験を行った。黒米と赤米はもち米である。栽培実験にあたってはNPO法人にいがた森林の仲間の会（通称もりとも）に協力をお願いした。

### (1) 復元水田

**目的** 弥生時代の稲作を体験し、復元することで現代農法との生育状況や収穫量の違いを比較検討する。借地面積1,725㎡のうち古代米の水田としたのは約300㎡である。

**田起こし** 4月28日 復元した木製鋤と現在の鉄製鋤を使い比べながら作業する。

**田植え** 5月12日 田植えに際して、岡山県百間川原尾島遺跡で見つかった弥生時代後期の水田跡の調査事例（図8）にならった密植と明治時代以降に普及した正条植えを行った。密植では1人あたりの作業範囲幅80cm間隔に2・3本ずつ、10～20株植えた。現在の田植えに比べて株の密度が非常に高く、苗の本数も多く必要となる。苗を植えた所には入れないので後ろに下がりながら植えた。このように密植では株の間隔が狭いため中に入って草取りを行うことは不可能である。

**田の草取り** 6月23日 田植えから1か月余りで稲は膝上の高さまで伸びた。密植範囲では日光がとどかないため雑草があまり生えない。一方、正条植え範囲には雑草が一面に生えた。稲株の密度によって雑草の生長に差があることがわかった。田の草取りは水田に入って土を攪拌することによって稲の根に酸素を供給し稲の生育を促す効果があるという。この日は1時間半かけて正条植え範囲約80㎡の草取りを終えた。

**生育状況** 7月28日に出穂を確認し、お盆の頃には稲穂が首を垂れ始めた。正条植えに比べ密植の株は分蘖<sup>ぶんけつ</sup>状況が良くない。

**収穫** 9月8日（赤米）、21日（黒米）密植の稲穂では復元した石庖丁と木庖丁を用いて穂首刈りを体験した。正条植えでは鎌を用いて根刈りをし、はさ掛けして乾燥させた。収穫量を比較するため黒米密植・黒米正条・赤米密植・赤米正条の各範囲内に3.3㎡の枠を設定し、株ごとに番号を付けて収穫した。21日には8日に収穫した赤米正条植えの稲束を千歯抜きを用いて稲穂から籾を落とす作業を体験した。

**脱穀・籾すり** 11月24日 復元した木製臼と縦杵を用いて穂首刈りした稲穂の脱穀と籾すりを行った。穂首刈

りした稲穂を臼に入れ、杵について脱穀する。籾の状態となったら、さらに杵について籾殻を取り除く籾すりを行う。途中で箕に移し、箕をあおって籾殻を飛ばす選別作業をする。籾すりと選別作業を繰り返すときれいに籾殻を取り除くことができ、玄米の状態となる。この籾すりと選別作業は弥生の丘展示館での来館者体験とした。

**収穫量の比較** 収穫時に番号を付けた稲株について正条植え20株、密植40株を無作為に抽出し、穂の本数と穂ごとの籾数・籾重量を計測した。密植についても当初正条植え同様に20株を計測したが、数値のばらつきが大きかったためサンプル株数を増やした。この計測値をもとに一反あたりの収穫量の算出を試みた。計測結果は第2表に示した。一反あたりの試算収量は正条植えよりも密植の方が多い結果となった。一株あたりの籾数・重量は正条植えが密植に対して黒米は籾数5.9倍・重量5.8倍、赤米は籾数5.4倍・重量5.2倍である。一方、一反換算での株数は密植が正条植えに対して黒米で6倍、赤米で7倍となるにもかかわらず、試算収量は正条植えと密植ではたいして違わない。密植は正条植えに比して種籾を多く必要とするので効率が悪いといえる。

### (2) 雑穀畑

**目的** 弥生時代の遺跡で確認されている作物について体験し、復元することを目的に行った。エゴマ（白）・エゴマ（黒）・ヒエ・シコクビエ・モチアワ・ウルチアワ・モチキビ・ウルチキビ・タカキビ（コウリヤン）・カラムシを1～2畝ずつ作付けをした。カラムシは編布<sup>あんざん</sup>と呼ばれる布の材料になる植物である。

**種蒔き** 5月30日 畝の中央に30cm間隔で4～5粒を深さ1cmに蒔いた。種は津南町農と縄文の体験実習館なじよもんより譲り受けた。

**草取り** 6月23日 古代米の草取りと合わせて行った。

**生育状況** エゴマの種は鳥に食べられたようで発芽が確認できなかった。8月末でアワ・ヒエ・タカキビ等が収穫間近まで生育した。中でもタカキビは160cm以上に達した。

**収穫** 9月13日 収穫できたのは10種類のうち6種類で、ヒエ・モチアワ・ウルチアワ・モチキビ・タカキビ・カラムシである。エゴマ（白・黒）・シコクビエ・ウルチキビは収穫に至らなかった。雑草と間違えて芽を抜いてしまった可能性もある。

### (3) ソバ畑

**目的** ソバも弥生時代に栽培されていた作物である。

**種蒔き** 8月11日に耕運機で耕し、13日に直播した。

草取り 9月8日の古代米収穫の後に草取りを行った。

生育状況 8月末には10cmほどに生長し、9月10日前後に開花した。

収 穫 10月29日と11月1日に根刈りし、はさ掛けと弥生の丘展示館のピロティに吊り下げて乾燥させた。

脱穀・製粉 11月10日に実施した秋の味覚体験の際に乾燥させておいたソバの束を棒で叩いて実を落とした。11月24日に古代米の粉すり・選別作業と平行して、石臼を用いてソバの脱穀・製粉作業を実施した。脱穀では上臼と下臼の間隔を広くして挽き、ソバ殻と玄ソバに分けた。製粉では上臼と下臼の間隔を狭くして玄ソバを挽き、ソバ粉にした。今回は石臼を使用したが、弥生時代には磨石と石皿を用いていたと考えられる。(相澤裕子)

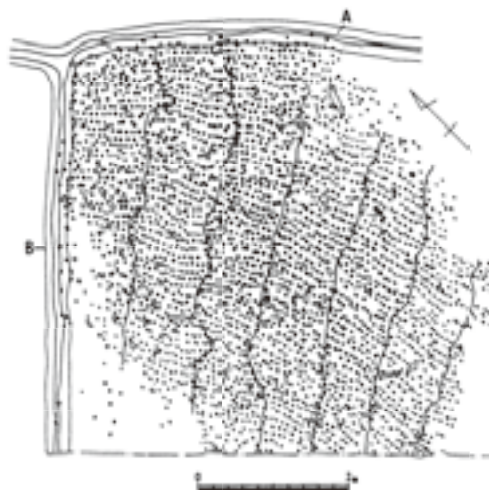


図8 百間川原尾島遺跡の水田稲株痕跡(1/100)  
((岡山県文化財保護協会1984)一部改変)

表2 古代米の田植え方法の違いによる収穫量の差

1 サンプリング 正条植え20株、密植40株の粒数・重量(総量)							
米の種類	黒米 (3.3㎡≒1.8×1.8m)			赤米 (3.3㎡≒1.8×1.8m)			
	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	
田植え方法	正条植え	20	32,783.0	784,899	20	30,805.0	710,276
	密植	40	11,212.0	272,298	40	11,471.0	274,443
2 サンプリング 一株当たりの稲穂本数・粒数・重量(平均値)							
米の種類	黒米			赤米			
	稲穂本数(本)	粒数(粒)	重量(g)	稲穂本数(本)	粒数(粒)	重量(g)	
田植え方法	正条植え	19.7	1,639.2	39.245	20.4	1,540.3	35,514
	密植	4.5	280.3	6,807	5.9	286.8	6,861
3 サンプリング面積(3.3㎡)当たりの粒数・重量(総量)							
米の種類	黒米 (3.3㎡≒1.8×1.8m)			赤米 (3.3㎡≒1.8×1.8m)			
	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	
田植え方法	正条植え	56	91,792.4	2,197,717	56	86,254.0	1,988,773
	密植	333	93,339.9	2,266,881	399	114,423.2	2,737,569
4 一反(約1000㎡)当たりの粒数・重量の試算							
米の種類	黒米			赤米			
	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	稲株数(株)	粒数(粒)	重量(g)	
田植え方法	正条植え	16,968	27,813,097.2	665,908,312	16,968	26,134,962.0	602,598,158
	密植	100,899	28,281,989.7	686,864,898	120,897	34,670,237.2	829,483,384

表1 市民参加人数と作業内容

年月日	市民参加人数	作業内容
2013/4/28(日)	13名	田起こし
2013/5/12(日)	8名	田植え
2013/5/30(木)	(もりとも・職員)	雑穀種蒔き
2013/6/23(日)	15名	草取り
2013/8/11(日)	(もりとも)	ソバ畑耕し
2013/8/13(火)	(職員)	ソバ種蒔き
2013/9/8(日)	18名	赤米収穫・ソバ畑草取り
2013/9/13(金)	(職員)	雑穀収穫
2013/9/21(土)	17名	黒米収穫、赤米粉落とし
2013/10/29(火)	(もりとも)	ソバ収穫
2013/11/1(金)		ソバ実落とし
2013/11/24(日)	8名	古代米脱穀・粉すり、ソバ脱穀・製粉



田植え(密植)



木庖丁による穂首刈り



稲束(左:正条植え、右:密植)



稲株(正条植え)



稲株(密植)



粉すり



ソバ殻と玄ソバ



ウルチアワ



モチアワ

## 引用・参考文献

- 相澤 央 2010 「馬場屋敷遺跡出土木簡について」『平成21年度新潟市文化財調査概要』新潟市教育委員会
- 青木 敬 2002 『古墳築造の研究』六一書房
- 青木 敬 2013 a 「古墳の墳丘構造」『考古学ジャーナル』No.644 ニュー・サイエンス社
- 青木 敬 2013 b 「古津八幡山古墳の築造方法とその背景」『シンポジウム蒲原平野の王墓古津八幡山古墳を考える』新潟市文化財センター
- 飯村 均 2001 「3生産の用具」『図解・日本の中世遺跡』小野正敏編 東京大学出版会
- 岡山県文化財保護協会 1984 『百間川原尾島遺跡2』岡山県文化財保護協会
- 小熊博史 1998 「佐渡海峡から揚陸された縄文土器」『長岡市立科学博物館研究報告』第33号 長岡市立科学博物館
- 春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 金子拓男・寺崎裕助 1982 『羽黒遺跡』見附市教育委員会
- 神林村教育委員会・山武考古学研究所 2001 『城田遺跡（本文編・図版編）』
- 川上貞雄ほか 1984 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会
- 川上貞雄 1997 『和納館遺跡』岩室村教育委員会
- 木島 勉・寺崎裕助・山岸洋一 2007 「24 長者ヶ原遺跡」『日本の遺跡』同成社
- 坂井秀弥 1981 『栗原遺跡（第3次調査概報）』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1982 『栗原遺跡（第4次・第5次発掘調査概報）』新潟県教育委員会・新井市教育委員会
- 佐藤 慎 2005 『斐太歴史の里確認調査報告書Ⅰ』新井市教育委員会
- 笹神村教育委員会 2002 『腰廻遺跡』
- 坪井正五郎 1911 「越後の海底から引上げられた朝鮮土器」『人類学雑誌』第27巻第1号 東京人類学会
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式系土器」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2011 「縄文時代における移動・移住の一事象」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第12号 新潟県立歴史博物館
- 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館
- 新潟県 1920 『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯 新潟県
- 新潟県 1937 『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯 新潟県
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012 『小坂居付遺跡』
- 広島県立歴史博物館 2000 a 『草戸木簡集成2』
- 広島県立歴史博物館 2000 b 『中世民衆生活と文字—木簡が語る文化史—』
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社
- 藤田亮策・清水潤三 1964 『長者ヶ原』新潟県糸魚川市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉岡康暢ほか 1988 『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館



平成17年度～24年度刊行発掘調査報告書一覧

書名	副書名	発行年月日	執筆者
居屋敷跡遺跡 第3次調査	県営地盤沈下対策事業新潟南部5期地区沢海揚水機場建設事業に伴う居屋敷跡遺跡第3次発掘調査報告書	平成19年2月15日	諫山えりか
日水遺跡 第3次調査	鍋田土地区画整理事業に伴う日水遺跡第3次発掘調査報告書	平成19年3月30日	今井さやか・相沢央
諏訪畑遺跡 第3次調査	介護老人保健施設「秋葉の郷」建設に伴う発掘調査報告書	平成20年3月28日	潮田憲幸
下大口遺跡 第2次調査	宅地造成に伴う下大口遺跡第2次発掘調査報告書	平成20年3月31日	今井さやかほか
沖ノ羽遺跡Ⅳ 第15次調査	県営圃場整備事業（担い手育成型）満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第8次発掘調査報告書	平成20年12月10日	立木宏明ほか
結七島遺跡Ⅳ 第13・15・17次調査	荻川駅東土地区画整理事業に伴う結七島遺跡第7～9次発掘調査報告書	平成20年3月28日	朝岡政康
結七島遺跡Ⅴ 第19次調査	市営下興野中野線道路改良事業に伴う結七島遺跡第19次発掘調査報告書	平成20年3月14日	諫山えりか
萱免遺跡 第2次調査	宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書	平成21年3月27日	立木宏明ほか
駒首湯遺跡 第3・4次調査	大型小売店舗建設に伴う駒首湯遺跡第3・4次発掘調査報告書	平成21年3月13日	渡邊ますみほか
上大川遺跡 第2次調査	市道正尺・早通線道路改良工事に伴う上大川遺跡第2次発掘調査報告書	平成21年3月31日	渡邊ますみ・池田ひろ子
中田遺跡 第2次調査	市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第2次発掘調査報告書	平成21年3月31日	笹澤（諫山）えりか
手代山北遺跡 第2・3次調査	市道亀田南線建設事業に伴う手代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書	平成21年3月31日	朝岡政康ほか
上浦A遺跡 第14次調査	市道結第6号市之瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書	平成22年3月31日	潮田憲幸・早田勉
大沢谷内北遺跡 第3次調査	(仮称) 国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内北遺跡第3次発掘調査報告書	平成22年3月26日	前山精明ほか
三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査	新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書	平成22年3月30日	朝岡政康・早田勉
大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査	一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡第2・4・6・7・9次発掘調査報告書	平成24年3月26日	細野高伯ほか
結七島遺跡Ⅵ 第24次調査	宅地造成に伴う結七島遺跡第2次発掘調査報告書	平成24年3月30日	龍田優子・(株)火山灰考古学研究所
大沢谷内遺跡Ⅲ 第18次調査	市道鎌倉横川線改良工事に伴う大沢谷内遺跡第2次発掘調査報告書	平成24年3月26日	前山精明・(株)火山灰考古学研究所
四石遺跡 第2次調査	(仮称) 新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四石遺跡第2次発掘調査報告書	平成24年3月30日	渡邊ますみほか
林付遺跡 第2次調査	新潟市立湯東南小学校体育館建設工事に伴う林付遺跡第2次発掘調査報告書	平成24年10月10日	相田泰臣ほか

新潟市文化財センター年報 第1号  
—平成23（2011）年度・平成24（2012）年度版—

2014年3月28日 印刷・発行

編集・発行 新潟市文化財センター  
〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1  
電話 025-378-0480

印刷 株式会社ウィザップ  
〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1-25